藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

みんなちがって、みんないい
～北浦家族旅行⑦～

ある施設の入り口で見かけた言葉「みんなちがって、みんないい」。童謡詩人、金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」の中の言葉だ。

今でこそ「障害も一つの個性」などと言われる時代になったが、みすゞが生きた明治時代ではさぞ新鮮に受け取られたのではないだろうか。もちろん、ハンディキャップのある人のことを詠んだ詩ではない。しかしみすゞの詩からはすべてのものへのやさしさが伝わってくる。

みすゞが長門市仙崎に生まれたのは明治三十六年（一九〇三）のことである。そして二十六歳の若さで亡くなった。詩作をしたのはわずか五年間である。二十歳の時に童謡を書き始め、作品を雑誌に投稿した。選者の一人、西條八十の目にとまり「若き童謡詩人の中の巨星」と評価される。

二十三歳で結婚するが、幸せな結婚生活ではなく、夫から詩の創作と投稿仲間との文通まで禁止され、離婚後、すぐに亡くなった。このような経験もあり、作品は散逸し、幻の詩人といわれていた。

しかし、後に童謡詩人となった矢崎節夫が大学一年の時、みすゞの「大漁」を読んで感動し、みすゞ探しをした結果、死後五十二年後に遺稿集が見つかる。みすゞの五百を超える作品が全集として発行されて世間の注目を集め、今日のような人気者になる。

私がみすゞと本格的に出会ったのは山口放送でラジオ番組の制作にかかわっていた時である。午前中の十分間の「お茶しませんか」という番組のレギュラーゲストにみすゞの詩を歌う「もりいさむ」さんをディレクターの一人が起用したことに始まる。山陽小野田市出身のもりさんは仙崎のみすゞ通りに居を構え、バンダナをかぶり、金子みすゞの詩だけを歌うシンガーソングライター。

今回、仙崎を訪れた時、以前訪れたことのあるもりさんの家を訪ねたが、錠がかかっており、隣の雑貨屋さんに聞くと「昨年廃業され、もうこちらにはおられません」ということであった。

帰宅して古い電話メモを頼りに電話したが、もうその番号も使われていなかった。二十年以上前のことだ。なぜみすゞの詩を歌い続けたのか聞いてみたかった。とにかくよくそれだけで長年生活することができたと感心する。今日、みすゞに脚光が当たっているように、もりさんももっと世間に認めてもらいたかったと思う。人生いろいろだ。

素晴らしい詩を残したみすゞの人生が幸福であったかといえば、どうもそうではない。作品は恵まれた環境からできるものではない。

以前訪れた時よりもみすゞ通りの記念館をはじめ立派な記念碑もできており、みすゞは今や仙崎を代表する存在だ。

先日、義父が満百歳で帰天したが、義父の家の近くに住む次女が、形見分けに持って来てくれたのは「みすゞ憧憬（しょうけい）」という、みすゞの詩に画家、中島潔が画をつけた定価三千六百円の本である。義父がこんな本を買い求めていたこと、それを私に持って来てくれたのも家族旅で娘と一緒に仙崎を訪れた結果である。

みすゞの記念碑

「みすゞ憧憬」から「みんなを好きに」